

## がん哲学外来市民学会 第1回大会

### 大会長あいさつ

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授 樋野興夫



私たちは、とかく表面に現れた現象や結果だけに目を奪われやすい。しかし、現象を生み出している、底に隠れているものにまで目を向けることが、実は大事なのである。そこまで見通す力が養われれば、時代の病理を診断できる力、独創的な力が培われてくる。そのような眼力を持った人物が今、求められている。

専門性に徹しつつ、哲学を持つ。このことは、病理学をはじめ、全ての専門分野で可能なはずであり、現代こそ、専門分野からの哲学者の誕生が求められていると思われる。がん哲学者、宇宙科学哲学者等の出現である。

どの分野の人でも、専門分野で発見した真理を、「魂を揺さぶる言葉」で語れるようになれるはず。がん哲学者とは、「高度な専門知識（がん学）と、幅広い教養」を兼ね備えている人物で、複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」である。

単なる肩書きでは、人の魂を揺さぶる言葉は語れない。肩書きで人を説得しようとしている人を「看板かじり」という。練られた品性、人格そのものから、人を説得する言葉が発せられるのである。教師と呼ばれる立場にある者は、特にこのことを肝に銘じておきたい。「教育とは教えることでなく、示すこと」である。

埋め立て地は、土台がはっきりせず、じわじわと水が浮き出てくる。これを液状化現象と呼ぶ。あらゆる分野で液状化現象が進む時代、「しっかりとした土台」、「しっかりとした骨組み」、「しっかりとした使命感」を持った人物、杭となって羅針盤となるリーダーが必要である。

このような時代にあって自己を見つめ直し、個人のアイデンティティを確立することは、時代の要請であると感じている。

まさに「がん細胞で起こることは、人間社会でも起こる＝がん哲学」であり、「生物学の法則＋人間学の法則＝がん哲学外来」である！